芦高新聞
発行所
県立芦屋高等学校
出版部
兵庫県芦屋市宮川町6の3

『告白』

――私が何者であるかまだ覚えておられる方もあるかもしれない――

今、芦高には〝大学受験〟という幽霊が出現している。われわれ二年生にとって大学入試まであと一年を割ってしまった。みなさんはいかにお過ごしだろうか。私がこれから書こうとしていることは調査をしていないためいささか個人的ではあるが、この機会に言ってしまいたいことである、またみなさんの反響も期待するのである。

芦高生は馬鹿であるというわけではないが、その特色として

①三無主義か何かしらんが何かにつけやる気のないこと。

②大学入試合格率の低いこと。

（断わっておくが私もその代表的一人である。）

この二点が目につく。私はこの二つに深い関連性をみ出すのである。①②はそれぞれ実に明白なことである。①については、一月十日発行の図書館新聞にクラス貸出し状態という題目のグラフは載せてあるがこれを見ると、昨年四～十一月までの八カ月間に満たないクラスが、三十クラス中二十五クラスにも達する。また、その中でも一学年の貸出しの低さにも驚く。また最もよく貸出しているクラスでも八カ月間に一人当たり四冊に満たない。いくら芦高図書館にもしろい本が少ないといっても、これでは芦高生の文化水準が疑われる。（いや、もしかするとカウンターを通さずに借りていく人が多いのかもしれないが……）クラブ活動についても同様だ。

今年に入ってからいくつかのクラブが同好会になりさがってしまった。『くはっとご立身をなされう瑞相にちと変じてなり上がりました』一学年代議員会ではクラブ必須化問題について話し合いが始められている。

度数分布表とかが配布されていよいよ不快指数は増大する。すなわちここに悪循環のループがある。そして彼は連休を善用してデ・キリコ展を見にいこうとしたが結局いかなかった。

芦高生のやる気のなさはまさにこのループに端発すると思う。そしてはじめに言った①と②の一見他人の関係の深い関係はここにあったらした。

というのは、個人をあまり強調しすぎたらしく、最近問題になってきた個人主義を助長する結果になったらしい。つまり、プライバシーのために「人間尊重」が利用されたわけだ。

都市化傾向を代表する、近所づきあいの減少、核家族化の進展など、「人間尊重」という言葉の内に「プライバシー」という言葉を入れて、「人間のプライバシーの尊重」というスローガンになってしまったのだろう。

それでは、ほんとうの「人間尊重」すなわち、真のヒューマニズムとは何だろう。

確かに個人主義も「人間尊重」の一つの考え方かもしれない。けれども、個人主義はヒューマニズムとはいえない。なぜなら、個人とは、ヒューマンすなわち人間なのであって、その人間が数多く集まって初めてヒューマニズムが進展する。

人間の心の交流のある所に始めて、ヒューマニズムが生まれるのだから、個人主義と共産主義的な個人否定には賛成できない。基本は、あくまで人間中心の生命至上主義でなくてはいけない。

それでは、どのような手段を用いればよいのだろうか。それがこのテーマの人間広場につながるわけだが結論は、次に期待していただきたい。

（2C　垣見多容）

芦高に人間広場を

ここ数年来「人間尊重」という言葉が呼ばれ、そしてかなり使い古されてしまった。

ひびきのよい言葉だけに、ジャーナリストに限らず、一般の人々にも愛用され、もてはやされたものだ。

今ではもう流行おくれになってしまったが、反戦デモや公害裁判などで大活躍したものだ。

さて、これらの言葉が人間社会に残したものを考えてみよう。果たして、これらの言葉がほんとうにその額面通りのことを、この非人間的人間社会へ残したのだろうか。この社会をほんとうに、人間中心のパラダイスに変えただろうか。

これらの言葉が残したもの、それは、真の人間尊重ではなく、人間尊重を利用した個人主義の増大ではないだろうか。

確かに、ある意味において、ある程度、人間は尊重されるようになった。そのある意味とは、個人において、ということだ。

個人個人を人間として、それぞれ尊重する。これは非常に良い考え方だといえる。そして、このような考えを広めたということにおいては、あの言葉も立派に役に立ったといえる。

ところが悪いことに、非常に都合の悪い副作用をもたらした。

三無主義は、そのような三無主義打倒を叫ぶ人々のまわりにだけ存在していたのではないだろうか。なぜなら、そのような人々、すなわち、三無主義打倒を叫ぶ人々と三無主義と呼ばれる人々の存在するところには、常に、大なり小なり人間社会がある、ということだ。社会がない所に三無主義は、今までも、そしてこれからも存在しないだろう。これが、先程の疑問の答えとなるだろう。

自治会組織という小さな社会では、三無主義は存在するけれども、その構成員、つまり自治会員ひとりひとりの生活では存在しないということだ。

ここでも、ヒューマニズムと同様に、個人主義が、社会に禍をおよぼしているわけである。

つまり、個人主義こそ三無主義の根本原因ではないだろうか。

したがって、三無主義を打倒するためには、個人主義をなんとかしなければならない。

とは言うものの、社会主義、共産主義的な個人否定には賛成できない。基本は、あくまで人間中心の生命至上主義でなくてはいけない。

それでは、どのような手段を用いればよいのだろうか。それがこのテーマの人間広場につながるわけだが結論は、次に期待していただきたい。

（2C　垣見多容）

一年をふり返って

間もなく新しい芦高生を迎えようとしている。この一年間、一年生は芦高を、どんなふうに感じ、二年生になってどんなふうに感じるのであっただろう。

この一年間で印象に残ったことは、人さまざまだろう。ところで体育祭のことを覚えていますか？各クラスで趣向をこらしたユニフォーム。さすが三年生と感心した。あのスーパー・マン、ステテコ姿。着てる本人は、どうか知らないが、見てる側としては、すごくケッタイ――何せ、運動をする時の服装のイメージを完全にこわしてしまっているし、ステテコに腹まき姿など、ジッと立っているだけでもおかしいのに、それが、目の前を走って行くのだから、笑わずにはいられない。こんな気持ちになった人は少なくないだろう。なごやかな一場面であった。

しかし、高校とはこんなに楽しいことばかりではないだろう。勉強、クラブ、友だちなどで、いろいろ悩んだりすることもあっただろう。そして今思うことは、高校とはこんなものだという半ばあきらめのようなものではないだろうか。

長いようでも短かい高校生活。計画的にムダなく過ごしたいものだ。たとえ、ひとつの目的を持つことを、一年をくぎりに、自分自身のことを考えてみるのもムダではないと思う。

指導委員会発足

昭和四十九年度

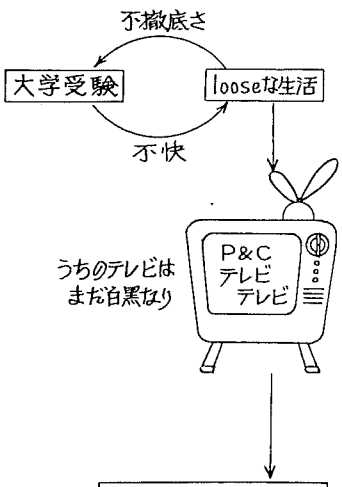
いよいよ三学期もおしまいで、執行委員会では新一年生を迎えるために今年も指導委員会を発足させました。同委員の立候補者を募集しましたところ、男子は十三名もの立候補者がありましたので、そのうちから七名を選ばせていただきました。しかし女子の方はなかなか集まらず、結局六名で四名定員に足らないままでありますが、新一年生を迎える準備を進めて行く上で同委員会の発足が急がれましたので、去る二月二十二日定員不足のままでありますが発足いたしました。なお役員と委員は次のとおりです。

委員長　若林伸和（1B）
副委員長　笠作祐子（1F）
書記　長野八久（2J）
男子　井上恵（2D）
　　垣見多容（2C）
　　小松恒温（2E）
　　榊真輔（2E）
　　深水彰彦（1D）
　　福田雅信（2I）
　　松下裕紀（1D）
　　渡辺励（2I）
女子　大西容子（1E）
　　清水裕子（1G）
　　白井加代子（1I）
　　手槌智奈美（1I）
　　松尾隆子（1E）
　　神野信子（1I）
　　山田整子（1E）

裏表独語

近頃の若い母親のなかには全く無責任な人がいる。つい先日、ノートを買いにスーパーマーケットへ行ったときのことであった。気がつくと、向こうの方で二才位の男の子が親にはぐれたらしく、大声で泣きながら立っているのが見えたが、誰も見て見ぬ振りをして通り過ぎて行った。あまりにもかわいそうなので歩み寄って、「ボク、ママは？」「お名前は？」と尋ねてみたが、ただ「ワァー、ワァー」と泣きじゃくるばかりでほとほと困り果てて、店員に預けようかと考えていると、向こうの方でバーゲンのセーターを混ぜくり返している女の人が見えた。たぶんあの人がこの子の母親だろう。自分の子供がいなくなっているのに全然気づいていない。じっと様子を見ていると、やっと気に入ったセーターを見つけたのか足元に置いてあった買物かごを手に取ってレジに行きかけたが子供がいない。せっかく見つけたセーターも放り出して、買物かごを小脇にかかえ、あわてながらこっちの方に走ってきて、子供を見つけると、ひったくるように子供を抱き上げ、ひとことふたこと小言を言いながら去って行ってしまった。別に礼を言ってもらいたかったわけではないが、自分が目を離していたという不注意をたなに上げて、子供だけをしかるという行為にはほとほとに腹が立った。

これがスーパーマーケットの中だったからよかったようなものの、道端で立ち話に熱中している時に、子供が道路に駆け出してもしだけではすまされなかったかも……。



常民について

山本宏美

現代国語の最後の授業だった。数時間にわたった文学史の問題演習を終えて、わずかに残った時間、ぼくらは、生徒たちに尋ねた。教室で学習した教材のうち、いちばん記憶に残っているものは何かと。そういう意味のことを。

するとあれこれ答えてくれたが、クラスによって幾分かの違いを見せながらも、予期した以上の生徒たちが、柳田国男の「清光館哀史」を挙げ、深く心を揺さぶられたと話した。そうか、きみたちもそうだったのかと、そのときぼくは呟いていた。

使用した教科書は筑摩書房の「現代国語3（二訂版）」である。その掲載順序をいったん解きほぐし、たとえば一学期の教材をこんなふうに並べ換えて、ぼくは新学期を迎えた。柳田国男の「清光館哀史」、丸山真男の「『である』こと」、夏目漱石の「現代日本の開化」、森鷗外の「舞姫」、魯迅の「藤野先生」そして猪野謙二の「明治の小説」。言葉を約めて言えば、近代とは何か、何であったかという課題が、さまざまな角度から問われているのが、これらの文章だと言っていいだろう。その冒頭が「清光館哀史」だった。

役人を辞し、朝日新聞社に入社した柳田は、大正九年の夏から秋にかけて、遠野を起点に、東北東海岸を旅行した。四十五歳の時である。小本、小子内と行く先々から書き送り、紙面を飾ったのが、「浜の月夜」など十九篇の文章だが、「どうも調子が取りにくいので中程から止めてしまった」と、後に『雪国の春』序文に記した、その書きづらさは、「僻地の生活を忘れて進行していく近代を批判し、いわば忘れられた民俗（ところで、その稀有な旅をあるいは彼も経験したのだろうか、おそらくしたに違いないと、その文章を読んで自問自答した本がある。彼――異友児玉隆也（本校十一回生で、在学当時一年から二年にかけて自治会執行委員、ひきつづいて二年から三年にかけて自治会長をつとめた）が著わした『市のある町の旅』（サンケイ新聞社）、『人間を生きている』（いんなあとりっぷ社）を読むと、地にへばりつく朝市・夕市のばあさんたち、郵便配達人、のういっきな老人などに、常民の原像を重ねおきたい気持にかられる。だがそのために柳田のような旅、つまり「良き旅行というのもやはり良き読書と同じで、単に自分だけが之に由って、より良き人となるのみならず、同時にこの人類の集合生活にも、何か新たなるものまた幸福なるものを斉し得るか否かに帰着する」という、そうした旅が要請されていることを、ぼくたちは忘れてはなるまい。

昨春教室で「清光館哀史」を読んだ時、ひとりの生徒が、「以後小子内の村はどうなっているのだろうか。いまだに女たちは旅人には意味のとれない歌を歌うのだろうか」と問うた。柳田の常民が彼を揺さぶったからだが、そうしたいかりをもった文章を教室で読めたことが、ぼくはうれしかった。

どうやら最後の授業に心をたかぶらせたのは、アルザスの一少年だけではなかったようだ。

（四九・一二・一二）

豆知識

――バスケット――

スポーツをしていて、その創案されたのは、あったネーミスによっての規則はよく知っていても歴史となると全くわからないことが多い。別に知っていなくてもよいかもしれないが、その歴史を知ったことによって、よりそのスポーツを身近かに感じるにちがいない。そこで、今回は、スポーツ大会で行なわれたバスケットボールの歴史を紹介しよう。

一八九一年アメリカのマサチューセッツ州スプリングフィールドのYMCAの体育学校の指導員の一人であるネーミスが、冬の間の室内運動として、バスケットボールを創案した。彼はこの競技をするものを金網においたといわれている。初期におけるこの競技の形式と技術は単純であって、ボールもサッカーのボールが使われ、ゴールも最初はモモを入れた籠（かご）が用いられた。

初めはボールをもって走ることも許されたが、これはすぐ禁じられ、プレーヤーの数も最大50人から、競技のスピード化の要求と、コートの広さが決まるに従って、9人、7人などの段階をへて現在の5人になった。バスケットボールという名称はモモの籠を利用したことに由来しているが、初めは底のあるままであったのが、後にこれを取り去り、コート面からの高さも四・二六mであったのを三・〇五mとした。ゴールのリングも内径38cmから45cmになり、最初なかったバック・ボールドも規定された。バック・ボールドの形も扇形から長方形になった。長身者の利を少なくするため3秒ルール、また、競技をスピーディーにするため30秒ルールなどができたのは一九〇〇年（明治33年）のことである。

これでバスケットの歴史について少しは知ってもらえたと思う。スポーツも最初のころは、実にこっけいなものだったにちがいない。そのころの時代にバスケットをしている人達の姿を想像してもつい笑いたくなってしまう。そのスポーツが今日、人間の体のすばらしい飛躍を私たちにみせてくれる。とくにバスケッなどは、やっている人たちをみているだけでゾクとするぐらいすばらしい。

ここまで、バスケットを発展させた人々の努力を感謝せざるをえない。

このようにすばらしいスポーツの歴史も心の片すみにおいて、スポーツを楽しんでもらいたい。

（世界大百科事典より）

あしやめぐり

(7)

金津山古墳とヘボソ塚

阪神電車を打出駅で降りて北へ約百米、図書館との中間あたりで東をみると、民家の屋根越しに数本の松木立が頭を見せている。これが芦屋市内で最大の墳丘を今に残す金津山（かなつやま）古墳だ。今では家々の間の小道の、いささか奥まった場所になっているが、江戸時代には打出村を通る西国街道のすぐわきにあって、人に知られた名所である。寛政八年（一七九六）の『摂津名所図会』には描かれている（写真参照）。かって打出天神のお祭で歌われた神輿（みこし）かきの音頭にも「打出名所はかずかずあれど、わけて名高い黄金塚（こがねづか）」という一節があった（『打出史話』）。

現在この古墳は、四周を民家に囲まれ、四十四米の直径に高さ約四米の円墳の形で残っている。ただ、市街地の中にあってあたりの地形が相当変形されているため、もとは前方後円墳だったとの説もある。正規の発掘は行なわれておらず、まだ謎の多い古墳だが、ともかく古墳時代中期の遺跡だと考えられている。

この古墳は、金塚（かねづか）・黄金塚・金津山といろいろに呼ばれるが、その名の由来にまつわる伝説がある。昔、阿保親王（平城天皇の皇子で、在原業平らの父）の御殿がこの打出の里にあった。親王はその村人達を深く愛し、打出が万一、飢饉になれば掘り出せるようにと、財宝をこの塚に埋めたという。元禄一四年（一七〇一）に、すでに『摂陽群談』が、阿保親王此岡山に於て、金瓦一万、黄金一千枚を埋せ、此里飢饉に及ぶ時、是を掘て飢を養」と書いている。また、打出の人は江戸時代から「朝日さす入日がやくこの下に、金（こがね）千枚、瓦（かわら）万枚」と歌っていたと言う。宝物の埋められた古墳だから金津山と呼ぶのだと言うのである。

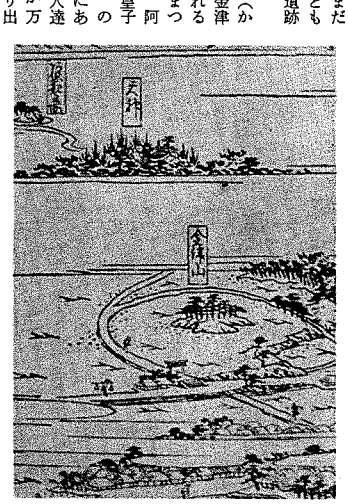
これと同様な伝承は広く各地に分布しているが、歌も「朝日照り夕日輝く山かげに瓦千枚小判千枚（三木市『郷土の民話・東播編』）など似たものは多い。

市内にはこのほか、阿保親王と関連する言い伝えをもつ古墳が数カ所ある。もちろん伝説なのだが、楠町八番地の笄（こうがい）塚や小槌町三九番地の鞍（くら）塚は、とどで、知る人も多い。

東灘区岡本に、ヘボソ塚という前期古墳があった。もとはその位置を本山町岡本字マンバイという中期の古墳があったが、今では町名改定でこの地名も消滅し、同様に古墳の方もほとんど姿をとどめていない。かつてここから、勾玉・管玉や石釧（石製の腕輪）や銅鏡が出土した。西北西に向く全長三五間、後円部の径一七、八間、高さ約二間の前方後円墳であったと記録されている。

ヘボソという変な名は、十六世紀に始めて出た歴史的現実をも、忘れてはならない。

（田辺真人）



『摂津名所図会』にも「かくの如くひなびたる節にて諷ふ。其由致をしらず」というように、すでに江戸時代には、塚の名と同じくこの歌も、意味がわからなかったようである。明治末年に出された『西摂大観』はこの歌を「甚だ解しがたきも、此中に上代の織姫とか何かに連絡するものあらんやと想像せらるるなり」と夢多い解釈を加えている。

ともあれ、われわれの祖先が、財宝や織り姫の眠りを想い、歌に謡ったこれらの遺跡が、日ごとに開発で切り崩され、塚の上の松林が排気ガスにあえいでいるのが今日の現実である。また、伝説とはうらはらに、ごく少数の権力者のために、幾多の古代の人々が、額に汗してこれらの古墳を築いた歴史的現実をも、忘れてはならない。

（田辺真人）

＊＊＊落し物＊＊＊

豊か（ウ）になったんでしょうか。高価なものを落としても平気でいる人が多いようですが、執行委員会室の入口では落し物の展示を行なっています。財布・メガネ・筆箱・傘からカーステレオのテープにいたるまで。心あたりの方はどうぞ来て見て下さい。なお前年度までの落しものは、すべて処分いたしました。

（執行委員会）